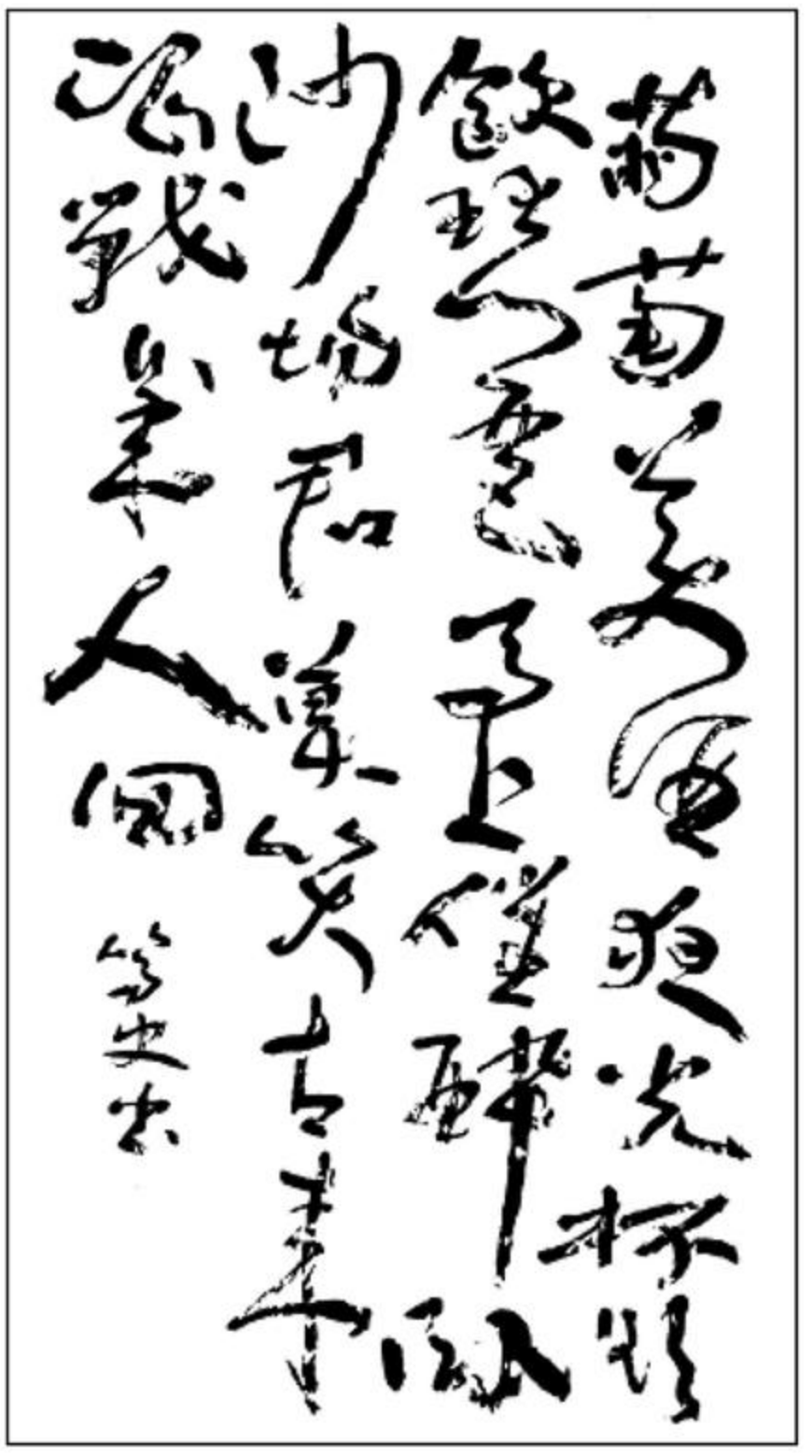
～作品紹介～

一、木塚篤史

創作　草書　王翰詩『涼州詞』　全紙

「葡萄美酒夜光杯　欲飲琵琶馬上催
　酔臥沙場君莫笑　古来征戦幾人回」

ふと、超濃墨で創作したらどんな感じだろう?と思ってやってみたら、これがおもしろいおもしろい。紙と筆がふれあう感触がしっかりと伝わってきます。調子に乗っていると全体が見えなくなるのが困り者ですが、いやぁ…楽しいもんです。



二、河野宏明

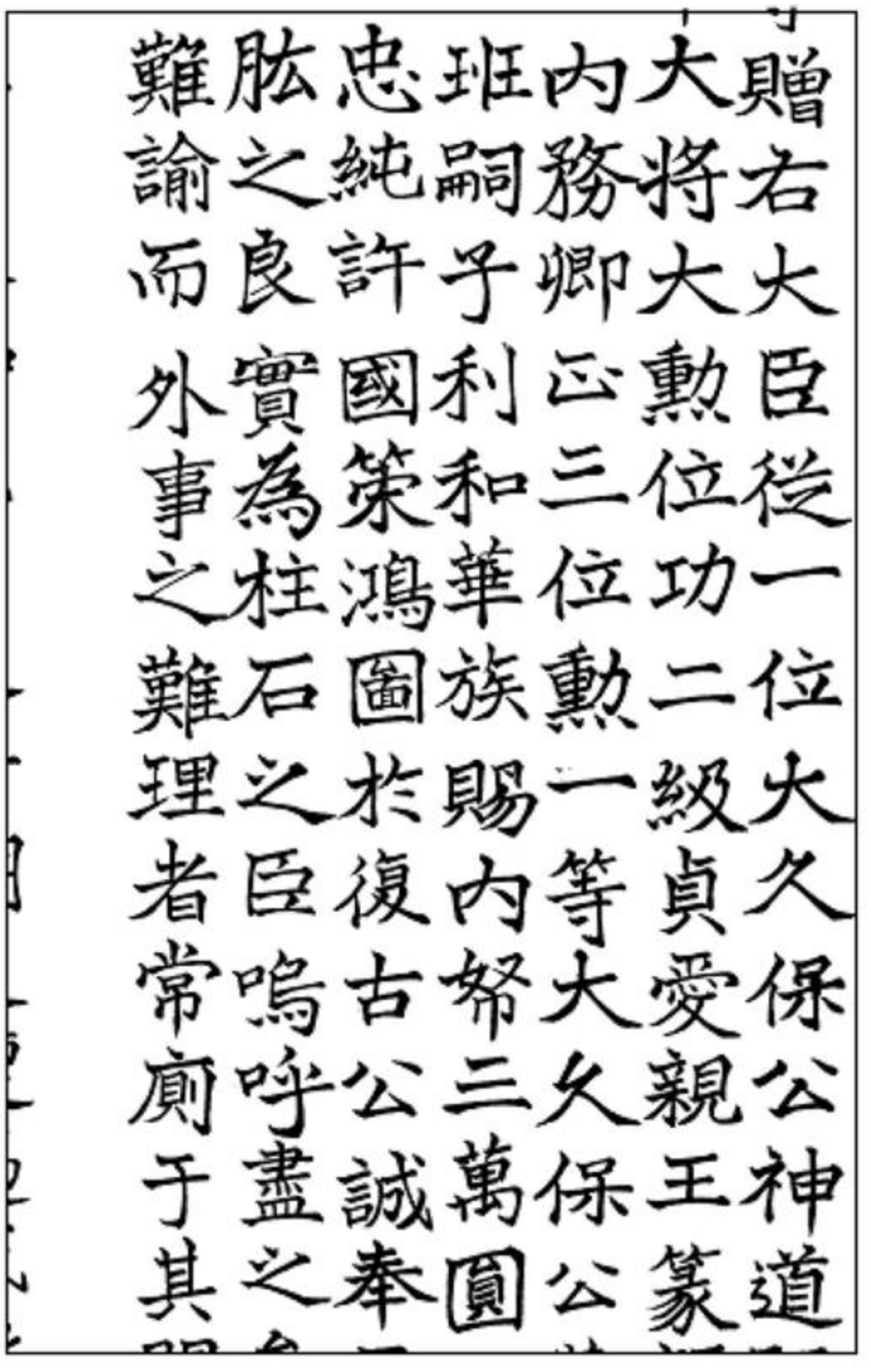
臨書　楷書・篆書　３尺×６尺

日下部鳴鶴『大久保公神道碑』

「故参議兼内務卿正三位勲一等贈右大臣従一位大久保公神道碑
…(合計、８２１字)」

やっと一枚書き終えると(約２０時間)、達成感を圧倒する疲労感に襲われました。今回の作品制作を通じて、自分にとって多字数の作品は「書くものではなく鑑賞するもの」だと分かりました。

う～ん、かんぱ～い（完敗）♪



三、仲宗根咲子
臨書　行草書　倪元璐『行草五言律詩軸』１７０×４６センチ
「橋影如長練　肥蛙侮瘦駒
竹倩雲為客　花因蝶作俘
慮頭糟氣好　何処三夫得」
字が好きだと思って挑戦してみたのですが、甘かったです。
後悔しました。でもやっぱり字は好きです。



四、鳥越亜希
臨書　行書　米芾『非才当劇』　半切
「人和端使一身閑」
題材は字のバランスで選びました。この作品は最初のほうに書いたもので、不完全ながらもなんとなくすんなりおさまってて気に入りました。



五、山本典子
臨書　行書　蘇東坡『與夢得秘校札』　半切
「期也區々無他・惟晩景宜倍萬自愛耳」
この作品を制作する途中で、愛について自分なりに考えてみました。
結論。「愛なんて気がついたときにそこにあるもの」
この「愛」の文字は気を遣いすぎですね。まだまだこれから修行を積んでいきたいと思います。

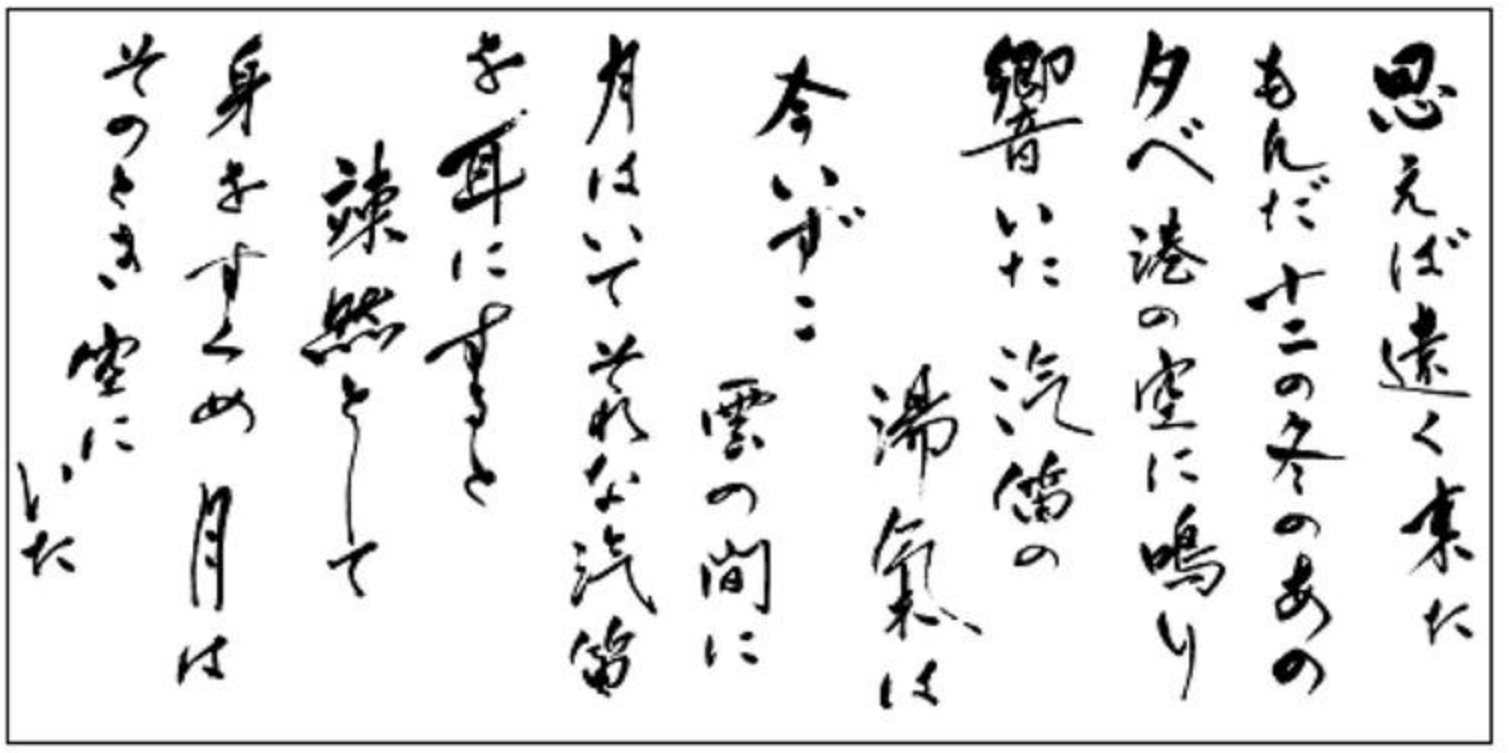


六、松永智子

創作　調和体　中原中也

「思えば遠く来たもんだ
港の空に鳴り響いた
雲の間に月はいて
竦然として身をすくめ
月はそのとき空にいた」

『頑是ない歌』　全紙



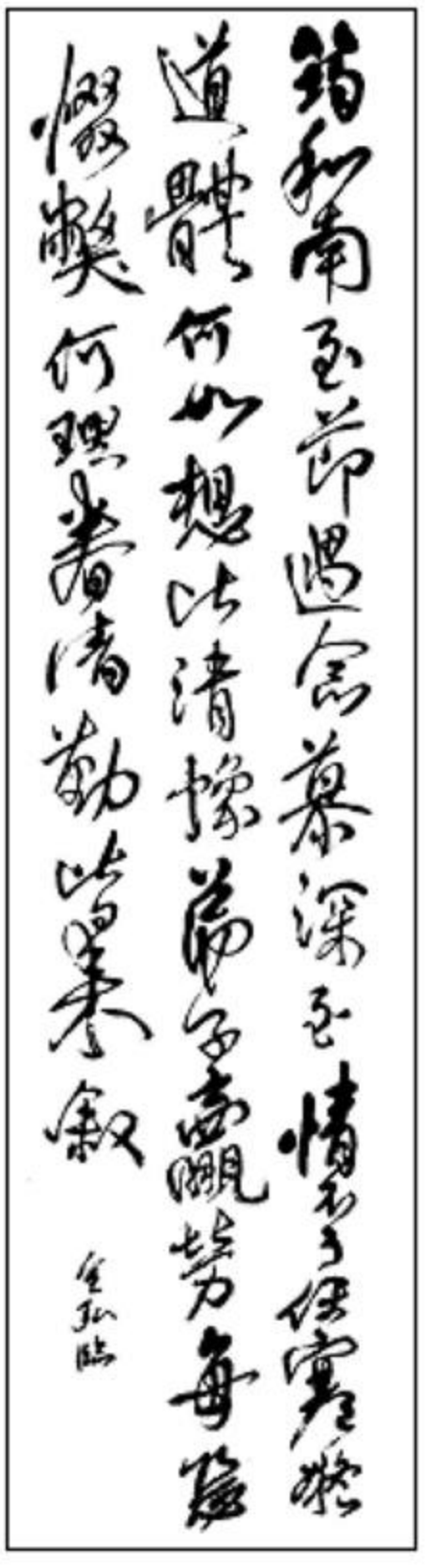
七、白田全弘

臨書　行書　王鐸『臨王庭筠行書軸』　2尺×8尺

「筠和南至節過念慕深至情不可任寒凝道體何如想比
清豫弟子羸労毎悪惙弊何理眷請勤比日来叙」

僕にとって、書道の作品制作は一種のもぐらたたきのようです。ある部分を修正しようとしてそこに意識を集中させると、また他の部分がおかしくなってくる…といった具合です。集中力が足りないのかもしれません。

そういった意味で、今回の王鐸の臨書はとても難しかったです。文字の形や大小、墨の潤渇、全体のバランス…あれこれ考えるとキリが無いので、とにかく一行一行が自然に流れることを第一に書きました。精神面でも技術面でもまだまだ未熟さの残る作品ですが、ご覧頂ければ幸いです。



八、西原英臣
臨書　楷書　鄭道昭『論經書詩』　2尺×8尺
「登雲峯山論經書詩魏中書侍郎
通直散騎常侍國子祭酒秘書監司州大中正出為」

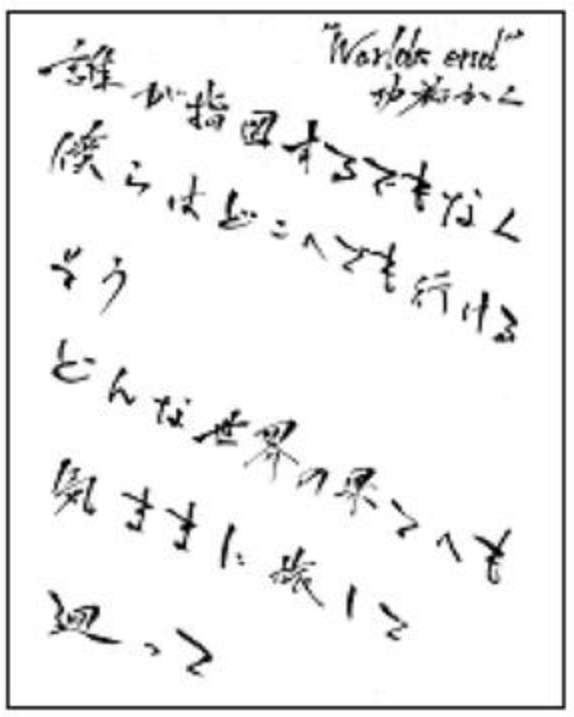


高校の時から書いてみたかった鄭道昭の論經書詩に挑戦しました。法帖の1文字1文字をみると確かに楷書作品であるが、全体をみると、行・草を思わせるような流れが作品の中にあるので、それを上手く表現するようにしました。

九、竹倉功祐
創作　調和体　『のーみゅーじっく　のーらいふ』
半切1／3　×4
椎名林檎「月に負け犬」（作詞：椎名林檎）
Base Ball Bear「ドラマチック」（作詞：小出祐介）
RADWIMPS「有心論」（作詞：野田洋次郎）
Mr. Children「World's end」（作詞：桜井和寿）







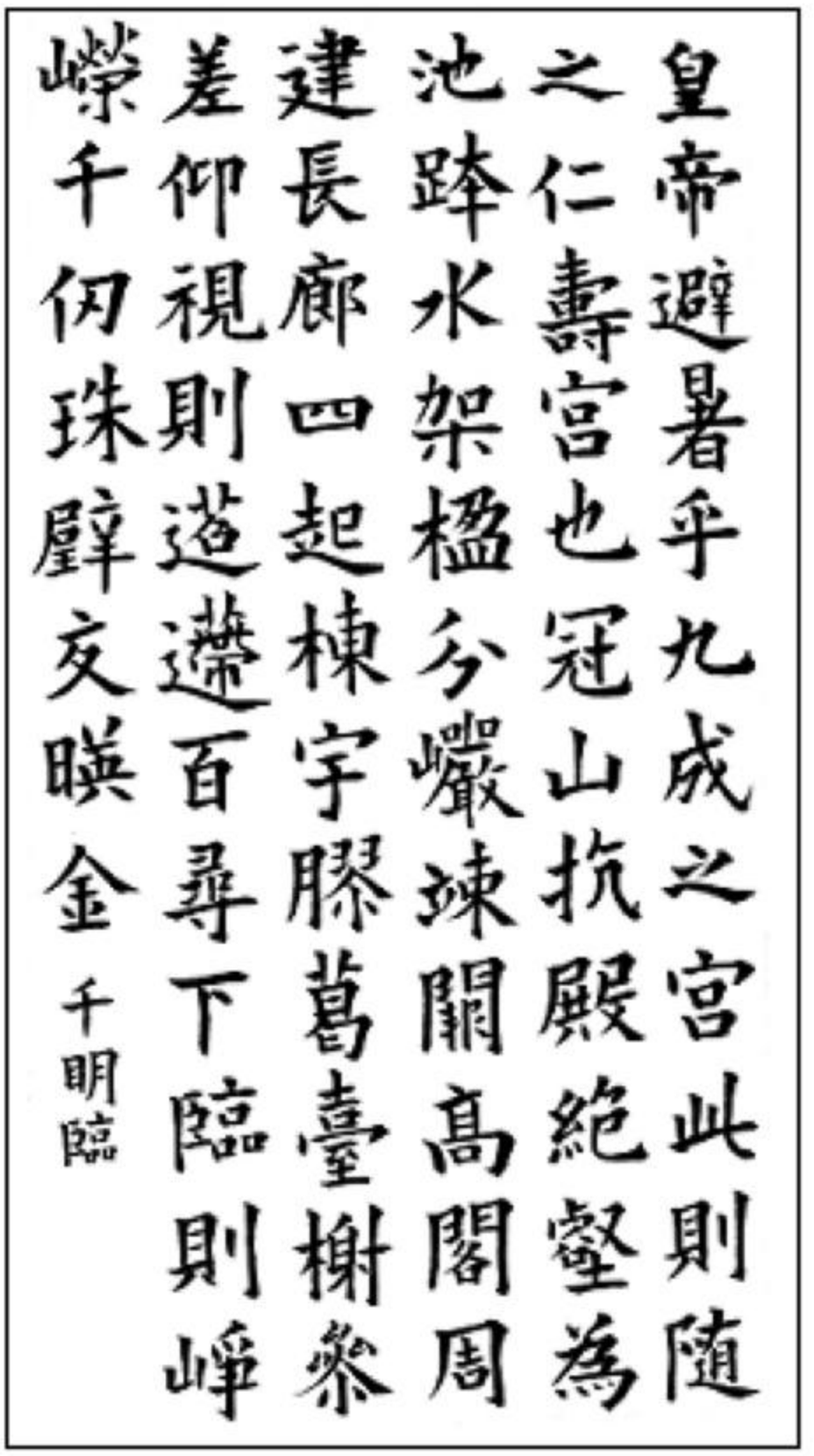
創作　調和体　『のーみゅーじっく　のーらいふ』
半切1／3　×4
椎名林檎「月に負け犬」（作詞：椎名林檎）
Base Ball Bear「ドラマチック」（作詞：小出祐介）
RADWIMPS「有心論」（作詞：野田洋次郎）
Mr. Children「World's end」（作詞：桜井和寿）
ここ数年、歌の歌詞に影響されてばかりです。歌によって自分の感情がより明確になっていく、そんな気がしています。「そんな自分自身を形作ってくれた歌の数々を表現してみたいなぁ」と思ったところからあれこれ試し、このような形に辿り着きました。

一〇、小島千明

臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　全紙

「皇帝避暑乎九成之宮。此則随之仁壽宮也。冠山抗殿。絶壑為池。跨水架楹。分巖竦闕。高閣周建。長廊四起。棟宇膠葛。臺榭參差。仰視則　百尋。下臨則崢嶸千仞。珠璧交暎。金」

きれいな字が書けるようになりたかったので、欧陽詢の楷書に挑戦してみました。集中力が問題でしたが、いい勉強になったと思います。



一一、上原達也

臨書　行書　黄庭堅『黄州寒食詩巻　跋文』　半切四連

「東坡此詩似李太白。猶恐太白有未到処處。此書兼顔魯公楊少師李西臺筆意。試使東坡復為之。未必及此。它日東坡或見此書。應笑我。於無佛處稱尊也。」

蘇軾と親交の深い作者が書いた跋文であり、「東坡がもう一度これを書いても、これほどに書けるとは限るまい」と、彼の作品を褒め称えている。この筆力に溢れた書をどう四連に収めるか、非常に苦心した。



一二、肥後真
臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切
「所以遊目騁懐足以極視聴之娯信可楽也」
本格的に作品を書くのは初めてです。何枚も練習を重ねましたが、書けば書くほど完成が遠のいて行き、書道の奥深さを実感しました。


所以遊目騁懐足以極視
聽之娛信可樂也
真臣

一三、頓部李歩子
臨書　行書　米芾『蜀素帖』　半切
「山清気爽九秋天黄菊紅茱満泛船千里結言寧有後群賢　至猥居前
杜郎閑客」
米芾の世界を表現しようと思い、縦画や力強さに着目して臨みました。この作品製作を通じて、自分らしさを取り入れつつ臨書するのはいかに難しいかを実感しました。


山清氣爽九秋天黄菊紅茱
滿泛船千里結言寧有後群賢
畢至猥居前杜郎閑客

一四、砂川祐子
創作　行書　『たいせつなもの　part.2』　４尺×４尺
目には見えないけれど、確かにある。
離れていても、つながっている。
そんな「絆」を、これからもたいせつにしていきたい。


絆

一五、河合直樹

創作　草書　『望』　3．5尺×4．5尺

前作の『兆』につづき、前向きなイメージをもつ言葉を書きました。

兆候は感じられても望みどおりのものが手に入らないもどかしさにとり憑かれてしまい、無念です。



一六、梅野佳奈・河野宏明・平川真弓・西原英臣

合作・創作　行草書　2尺×8尺の四連

『江梅　杜甫の詩より』『早梅　齊巳の詩より』

『梅花　王圭の詩より』『嶺梅　齊巳の詩より』

「梅蕊臘前破梅花年後多絶知春意好最奈客愁何雪樹元同色江風亦自波故園不可見巫岫鬱嵯峨」（梅野）

「萬木凍欲折孤根暖獨回前村深裏裏昨夜一枝開風遞幽香去禽窺素艶来明年猶應律先發映春臺」（河野）

「冷香疑到骨瓊艶幾堪餐半醉臨風折清吟拂暁観贈春無限意和雪不勝寒桃季有漸色枯枝試並欄」（平川）

「蠻烟無處洗梅蕊不勝清顧我已頭白見渠猶眼明折来知韻勝落去得愁生坐入江南夢園林雪正晴」（西原）

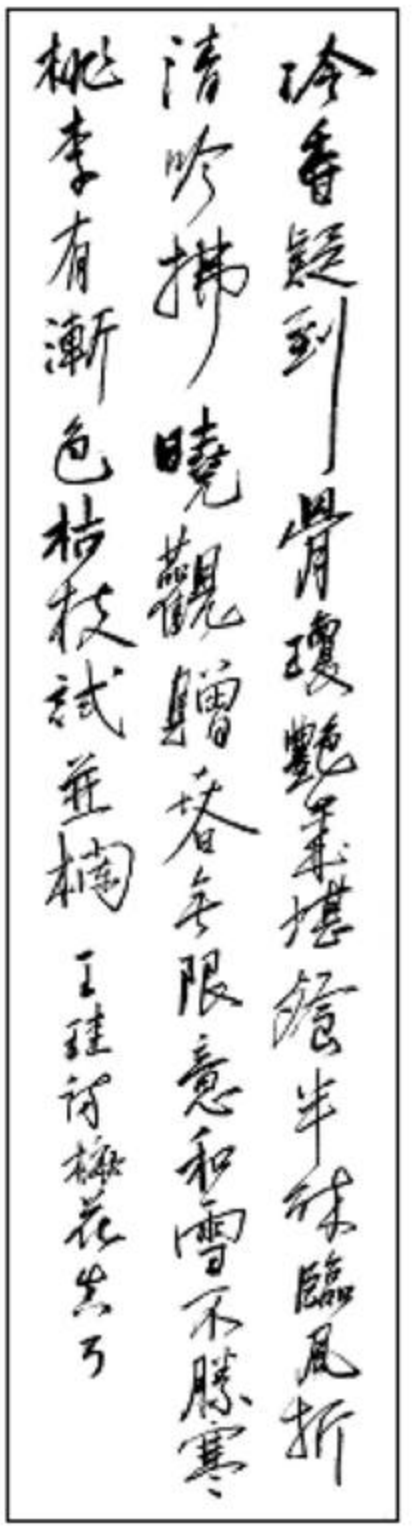
最近は筆を持つのも厭わしく思っていたのですが、合作なので挫折できず、やむを得ず書き始めてみると、意外にも愉しみながら書くことができました。合作に誘ってくれたことに感謝です。（梅野）

唯一まともに臨書したことのある『楽毅論』で学んだ独特な線の〝抑揚〟や〝うねり〟、そして今しかない若さ(…22才ですけど何か?)から出る〝勢い〟を紙面上に展開するよう心がけました。（河野）

初めての二八作品製作となりました。合作で、それぞれの個性を出しあっていますが、一人、個性を出し切れなかった感があります。まだまだ自分の字を書くには時間がかかりそうです。（平川）

作品製作で一番苦労したのは文字の形、大きさ、配置でした。創作作品という性質上、書けば書くほど最初に思い描いていたものとは違っていく事に戸惑う所も多々あったが、臨書作品を完成させた時とは違った達成感を味わえたように思えます。（西原）









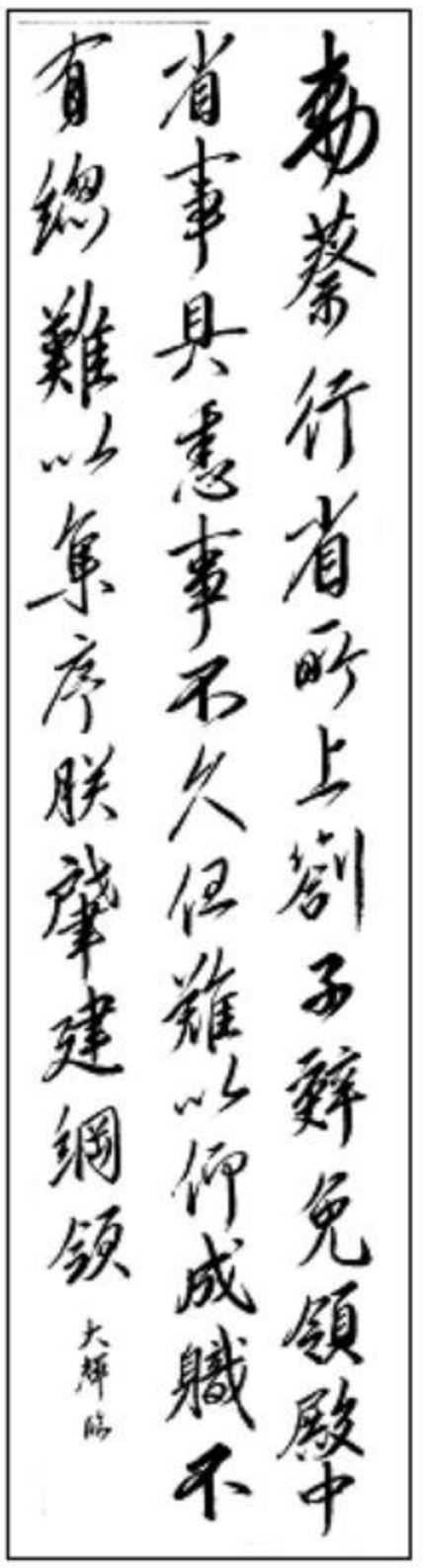
一七、原山大輝

臨書　行書　超佶『蔡行勅巻』　2尺×8尺

「勅蔡行省所上劄子辞免領殿中省事具悉事不久任難以仰成職
不有總難以集序朕肇建綱領」

原本の持つ鋭さに惹かれて臨書しました。その雰囲気が少しでも出ていれば幸いです。

二八には初めて挑戦しましたが、紙が大きい分伸び伸びと書けてスッキリしました。



一八、河合直樹

臨書　行書　顔真卿『祭姪文稿』　2尺×8尺

「天　禍いを悔いざれば、誰か茶毒を為さん。爾が残に遘うを念えば、百身も何ぞ贖わん。」

この法帖にめぐり会った頃は、あまりの豪胆な筆意に只々踊らされていましたが、折に触れて接していくに従い、藝術としての書道を体現するかのごとき書風に強い魅力を感じるようになりました。今となってはお気に入りの法帖のひとつです。



一九、白田全弘

臨書　草書　傳山『草書軸』　2尺×8尺

「園廬僻陋那堪比謝野幽微不足攀何似　峰卅六長随申甫作家山」

くるくると回るような線が特徴の傳山の書に惹かれ、臨書に挑戦してみました。随所に見られる独特な線の「揺れ」を表現するのは予想以上に難しく、苦労しましたが、何とか傳山らしさを出すことはできたかなと感じています。



二〇、三幣剛史

臨書　隷書　楊峴　半切二連

「天星隊(墜)地能為石　玉水清流不貯泥」

楊峴の隷書を濃墨と羊毛で重厚な雰囲気にしてみました。臨書というよりも創作に近くなってしまいましたが、楊峴独特の趣を感じていただけたでしょうか。



二一、稲垣紀子

臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　半切

「釣臺驚濤可晝眠」

卒業作品として記念に残る作品を仕上げようと思いました。ゴージャスな紙なので贅沢な気分で書けました。



二二、津島由衣

創作・行書　『江山満花柳』　半紙サイズ

「江山満花柳」

「山や川（江）に花や柳が咲き誇（満）っている」という意味です。

よく書かれている課題ですが、それを小品で表現してみました。単調にならないように心がけました。



二三、得能麻希・福永円・古俣慎也

合作・臨書　仮名

伝紀貫之・紀友則『寸松庵色紙』　伝小野道風『継色紙』　全紙

「秋かぜのふきあげにたてるしらぎくは
花かあらぬかなみのよするか
秋の夜はつゆこそことにわびしけれ
くさむらごとにつゆむしのわぶれば
あきはぎの花さきにけりたかさごの
をのへにいまやしかはなくらん
なつのよはまだよひながらあけにけり
くものいづこに月かくるらん」

「わがせこがころもはるさめふるごとにのべのみどりぞいろまさりける

あまのがはあさせしらなみたどりつゝ
わたりはてぬにあけぞしにける
むめのかをそでにうつしてとめたら（ば）
はるはすぐともかたみならまし
わたつみのかざしにさけるしろたへの
なみもてゆへるあはぢしま山」

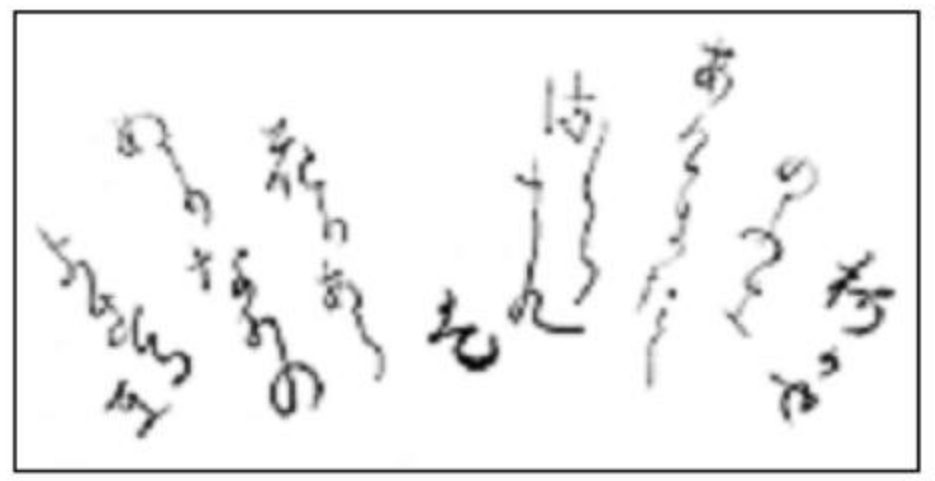
いろは歌から始めて、やっとここまでたどりつきました。
ど素人に変わりはありませんが、貫之さんと道風さんの字を
通して平安の香りをほんの少し感じられた気がします。（得
能）

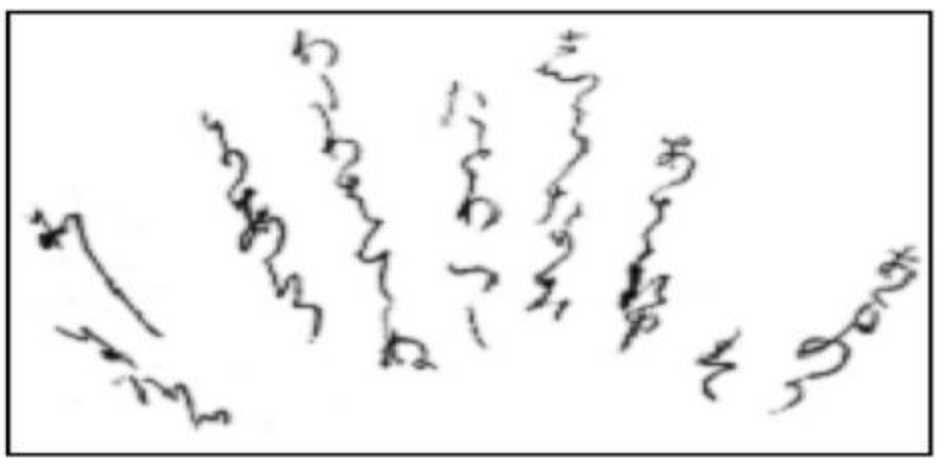
仮名独特の線のやわらかさや流れるような動きを意識しつ
つも、全体的に弱々しくならないように気をつけました。扇形
の紙についても、詠まれた和歌に合う色を選ぶよう心がけまし
た。（福永）

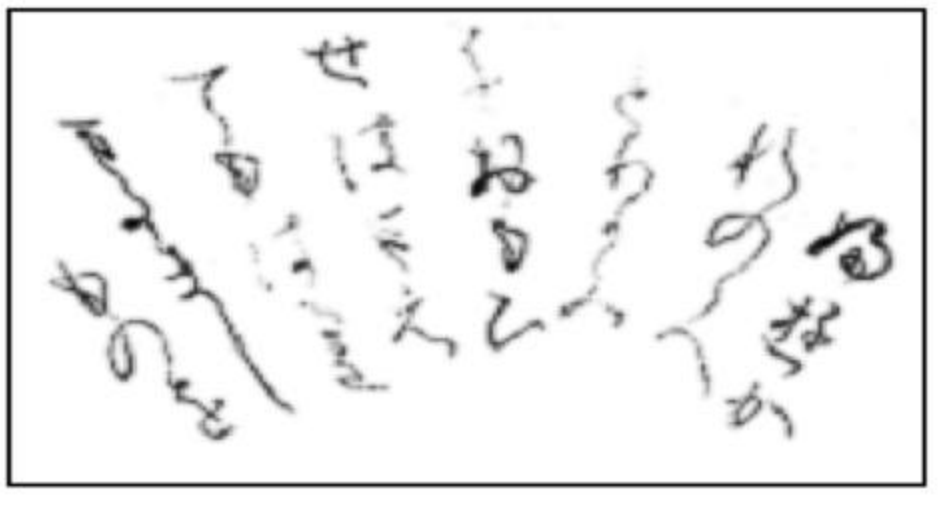
二四、門脇友維

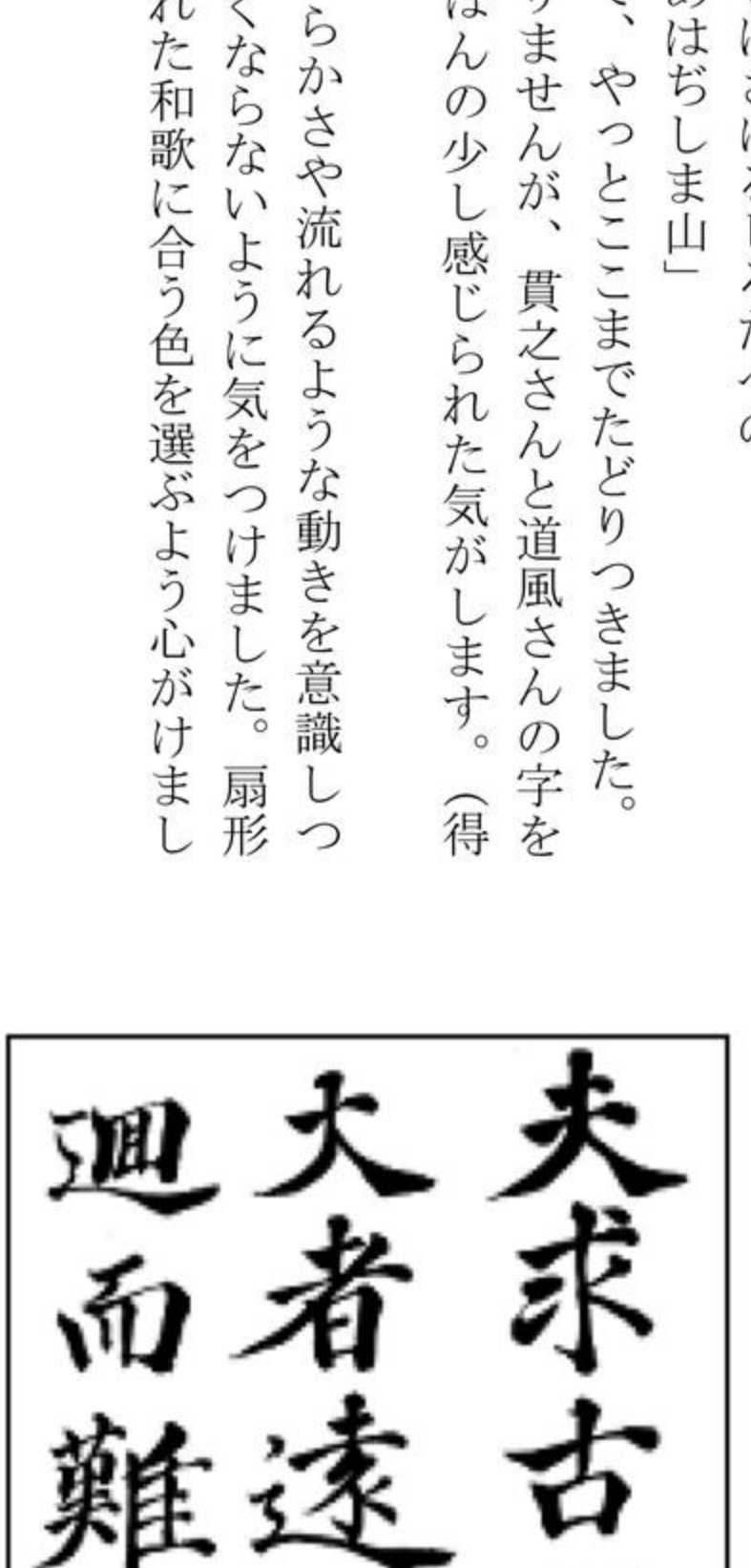
臨書　楷書　『楽毅論』　半切１／２

今回で、楽毅論を書くのは二回目です。楽毅論は書いていて
とても楽しいので、機会があればまた挑戦したいです。









二五、砂川祐子
創作　調和体『支えてくれた人へ』　全紙3／2

面と向かって言うのはちょっと恥ずかしいけれど、こんな形でなら伝えられそうです。



二六、吉田幸広
臨書　楷書　柳公権『玄秘塔碑』　半切

「和尚は其れ出家の雄ならんか。天水の趙氏は、世よ秦人たり。初め母の張夫人梵僧を夢む。謂いて曰く、当に貴子を生むべしと。」

このような作品展に出品するのは初めてです。楷書の作品ということで、ひとつの作品の制作を通じて集中力を保ち続けることに苦労しました。



二七、久田喜朗
創作　行草　『細草幽蘭秋徑馥清風明月夜窓虚』　半切

「秋色を帯びた小径には秋の草々や蘭の香りがただよっており、静かな窓辺に明るい月がすがすがしい風と共に訪れる。」

半切に書くのも行草を書くのも初めてで、色々と苦労しました。



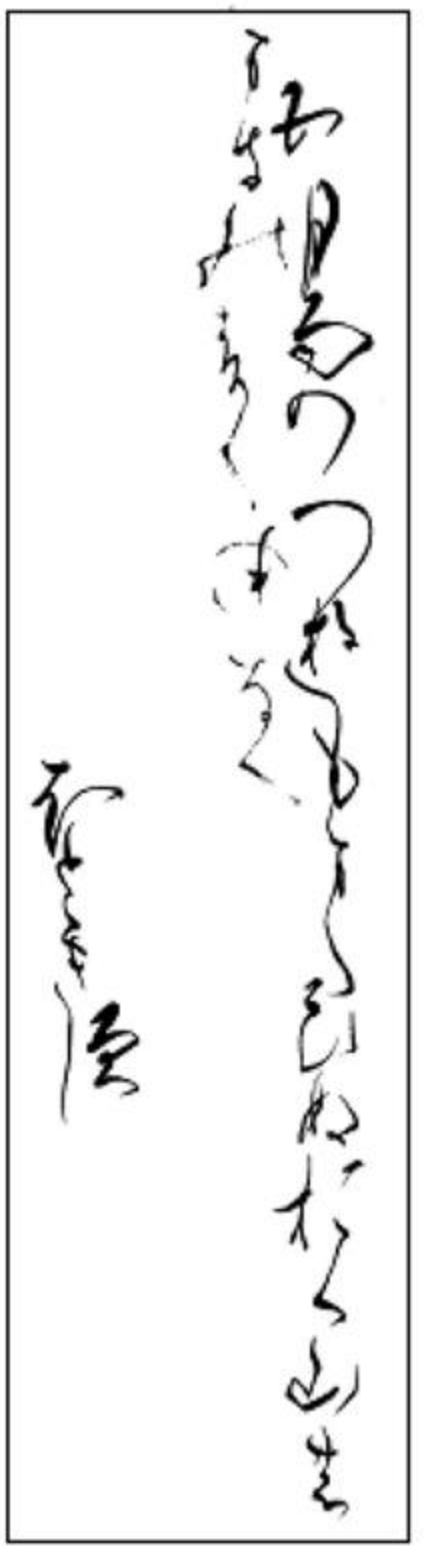
二八、上原達也
臨書　行書　何紹基『行草山谷題跋語四屏』　半切
「匹紙。子予一挙覆瓢。因為落筆不倦。」
前も書きましたが…って誰も覚えてないですかそうですか。
形臨に挑戦しようとしたところ、手本を見ながら正確に書くという行為は全く持って自分に不向きであると気付きました。よって手本を見ながら好き勝手に書きましたが、芸不足の感も。



二九、竹倉功祐
創作　隷書・行書　『清心』　半切1／3　×2
最近、就職活動やゼミなどで、一日一日が慌ただしく過ぎていきます。そんな日々の中この作品に向き合うことで、ほんのわずかですが心にゆとりのようなものが生まれた気がします。



三〇、頓部李歩子
創作　行書　半切
「五月雨の露もまだひぬ奥山のまきの葉がくれ鳴郭公」
仮名の流れに吸い込まれるような作品を書きたいと思い、とにかく気脈一貫を意識して書きました。まだまだ未熟なので、これからも研究を続けていきたいです。



三一、中原初実
創作　楷書　白居易『牡丹芳』　半切2／3
「我願う暫く造化の力求め　牡丹妖豔の色滅却するを」
大輪の花を咲かせてみたいものです



三二、上原達也

臨書　行書　蘇軾『黄州寒食詩巻』　全紙

「空庖煮寒菜，破竈燒濕葦。那知是寒食，但見烏銜紙」

「寒食帖」とも呼ばれ、不運の人生を送った作者の悲憤が滲み出た詩文である。原本では文字や行間が大きく変化しているが、そういった感情の表れを自分の作品として構成しようと試みた。

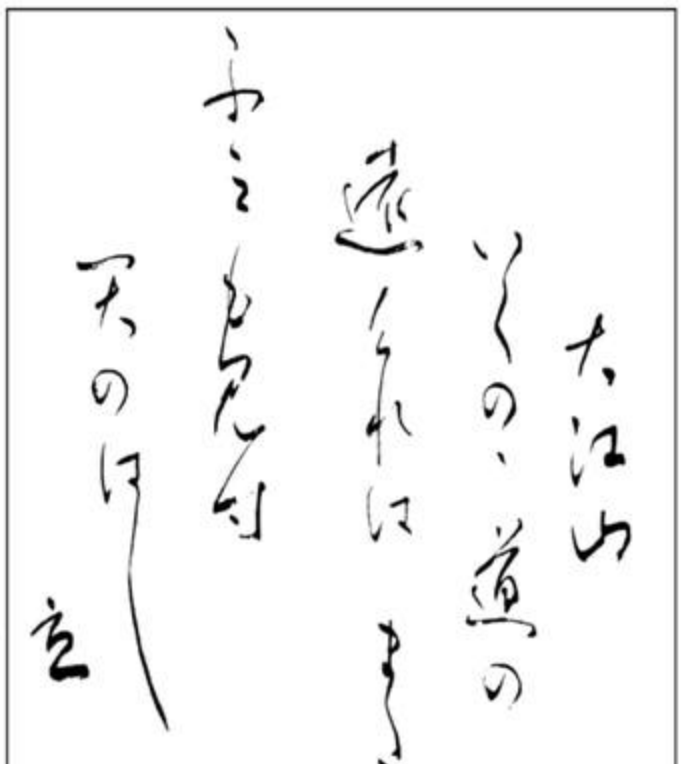


三三、津島　由衣

創作　調和体　『百人一首より』　色紙サイズ

「大江山　いくのの道の　遠ければ
まだふみも見ず　天の橋立」（小式部内侍）

今年の夏休みに母と丹後半島へ旅行に行きました。その土地を歌った和歌を旅の思い出にと、作品にしてみました。



三四、河合直樹

臨書　隷書　『石門頌』　全紙

「（其）澤南隆。益域爲充。高祖受命。」

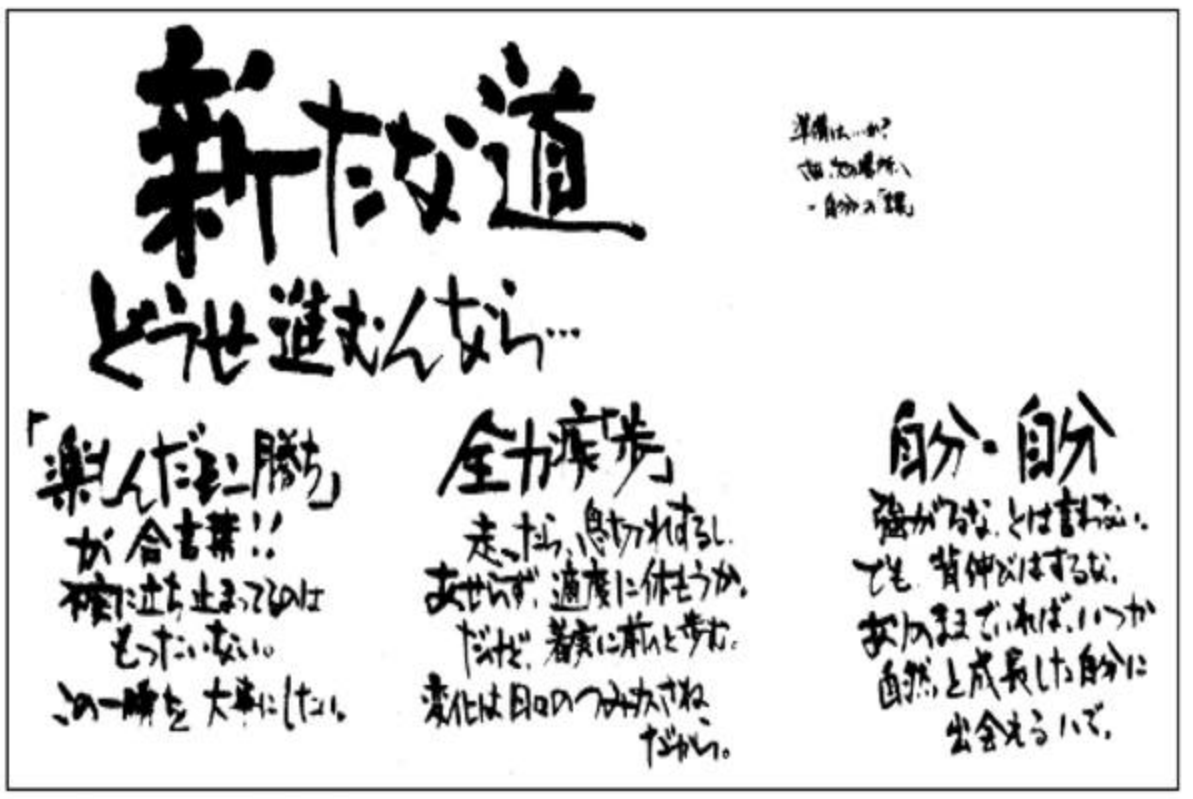
初めて隷書作品に挑戦です。字形ももちろんですが、殊に趣深い線質こそが作品の「命」なのだと実感しました。



三五、砂川祐子
創作　調和体　『言葉×詞＝明日へのコトバ』　半切、全紙

来春、新たな道に進む自分へ向けた「言葉」と、途中で立ち止まったとき、前に進めるよう背中を押してくれる「詞（ことば）」を組み合わせてみました。私だけでなく、あなたの明日の力になれるコトバがあれば幸いです。





三六、松永智子
創作　調和体　『正岡子規の句より』　半切
「赤とんぼ　筑波に雲も　なかりけり」
初夏書展（『とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな』）に続き、トンボの句を書きました。
夏は夕暮れ、秋は空。それぞれ思い入れのある風景です。



三七、河野宏明
調和体　創作　西原理恵子『風』　半切
「ねぇ、風はどこからふいてくるの
ずいぶんまえの　君のしつもん。（一部抜粋）」
調和体作品の良い点は，読める，ことだと思うのですが、自分の場合，文字数が３０字を越えて、構成が単調な作品，はメンドクなって読まないので考えた結果、構成はこうなりました。一番上の題字(風)が唯一書道部っぽさを醸し出していると思うのですが…如何でしょう？

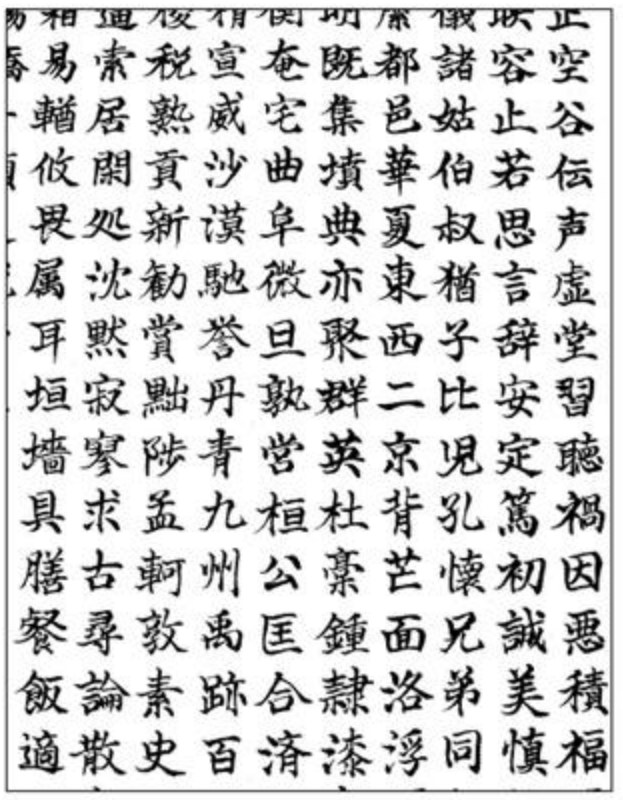


三八、仲宗根咲子
創作　篆書『ドライブ』　全紙1／2
「旅」

一回ぐらいは創作をやろうと思い、やってみました。篆書もやったことないので、ついでにやってみました。
篆書の「旅」に篆書の「車」が組み込まれています。
楽しい思い出がここで生まれます。



三九、西原英臣
臨書　楷書・行書・草書　『千字文』　半切三連
「天地玄黄宇宙洪荒日・・・・・・・一書体合計千字」
今回で二回目の全臨となりました。前回は楷書・行書の二書体でしたが、今回は草書も含め三書体に挑戦しました。前回全臨したときは高校一年でしたが、あの時より作品の完成度は高いと思います。作品製作を通じて今まで以上に忍耐強く作品に向かい合う事が出来るようになったと思う。



四〇、河野宏明
模刻　篆刻　西川寧『竫龕』
初心者なので「まず模刻を」と思い、,西川寧､の作品に取り組みました。本物と比べると全体的に線に，切れ､のない作品になりました。精進して篆刻､そして自分自身も，切れ､があるようになりたいものです…



5．5×5．5センチ

四一、原山大輝
臨書　行書　欧陽詢『行書千字文』　半切
「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒来暑往秋収冬蔵閏餘成歳」
作品名上は行書ですが、楷書らしさが残っているため、書いていて基本の大切さを痛感しました。



四二、砂川祐子
創作　調和体　『きっかけ』　半切
「書道の楽しさ」を気づかせてくれた思い出の作品です。高校3年生のとき、試行錯誤して書いたことを思い出しながら、今の自分のアレンジで書きました。5年前とどう変わったかは……（聞きたい方は砂川まで）



四三、河合直樹
創作　行書　『気剣体』　全紙
「氣剣體」
剣道において正しい打突の条件を「気剣体の一致」といいます。不意に湧き上がってきた「創作」意欲に総てを任せて書き上げました。荒々しさの残る作品ではありますが、冷静な精神状態にはない生々しさが気に入ったので敢えて出品しました。





四四、木塚篤史
臨書　隷書　『乙瑛碑』　半切二連
「通高第事親至孝能　奉先聖之礼為宗所　帰除穌補名状如牒
平煌恐叩頭」
久々の隷書の臨書となりました。大学に入って、まず何をしようかと迷っていたら、とりあえず基本に帰ろう！という気になって書いたのがこれ。乙瑛碑です。重厚かつおおらか。こんな隷書が、私は好きです。



四五、仲宗根咲子
臨書　行草書　倪元璐『行草七言絶句軸』１８８×４０センチ
「寂寞幽斎瞑煙起　満径西風落松子　遠公一去兜率宮　惟有
門前虎渓水」
雰囲気が好きだと思って挑戦してみたのですが、甘かったです。後悔しました。でもいい思い出になりました。



四六、西原英臣
創作　草書　杜甫『登岳陽楼』　連落
「昔聞洞庭水今上岳陽楼呉楚東南折乾坤日夜浮親朋無一字老
病有孤戎馬關山北憑軒涕泗流」
この詩は杜甫が岳陽楼に上って洞庭湖を眺めているときの杜甫の心情をうたっているもので杜甫が晩年になってのものである。作品製作で苦労したのは作品の構成をどうするかで、これはやはり創作作品の醍醐味だと思う。

昔閑洞庭永今上帝陽梅
某冬東南析乾坤日夜浮
親朋冬一字老病冬孤舟我馬
窓山心憑軒湖細沫

松南之詩 英臣



This book was
made by the LeME